

外国人留学生の宿舎支援と「共同の生」

—留学生と日本人学生の交流は対等の立場で—

Living Together:

International Students and

Japanese Students on an Equal Footing

公益財団法人 京都国際学生の家 理事長、京都大学名誉教授 **内海 博司**

UTSUMI Hiroshi

(Chairman of Kyoto International Students House, Professor emeritus of Kyoto University)

キーワード：共同の生、出会い、外国人留学生宿舎

はじめに

最近、テレビを見ていると留学生と日本人と一緒に生活する寮が東京にできたということ、大きく取り上げていました。素晴らしいことだと思いますが、私が現在理事長をしている京都・聖護院にある（公財）京都国際学生の家は、半世紀前から留学生と日本人と一緒に生活している国際学生寮です（写真1）。私は、これまでに3度、1度目は学生として（50年前に2年間）、2度目（40年前に2



写真 1（公財）京都国際学生をの家の概観

年間)と3度目(28年前に3.5年間)はハウスファザー(住み込み監督人)として住み込んだ経験を持ちますが、留学生問題の研究者ではありません。留学生との出会いは、50数年前の学部2回生の時に「京大留学生友の会」という学生サークルを率いたのがきっかけです。このサークルの設立趣旨には、「学生として、対等の立場で日本人学生と外国人学生とが交流し、互いの文化・風土・社会を理解して、ひいては国際親善を図ることを目的とする」と書かれていましたが、実際は留学生の宿舎探しや、自主講座で日本語を教えたりするのがこのサークルの主な活動でした。某首相の発言で賠償留学生制度が突然始まり、東南アジアの留学生が学部学生として入学するようになりましたが、当時は大学の教育スタッフ、事務スタッフ、宿舎等の留学生の受け入れ体制は皆無の状態、彼らは日本語や宿舎のことで本当に困っていました。

サークル活動をしていて、一番困惑し腹を立てたことは「外人もOK」という下宿で、留学生が欧米人ではなく東南アジア人であることが判ると断られることでした。また外人は金持ちであるとして、日本人学生より高い下宿代を要求されたことでした。当時の日本人の意識には、「外人＝欧米白人＝金持ち」の図式があり、東南アジアの人達を蔑視する人達がいたことです。このような中で、日本の国費留学生が待遇改善を求めてストライキを行なうとか、受け入れ体制の不備と日本人の意識の低さに嫌気をさしたマレーシアの留学生H氏が帰国する事件も起きました。何気なく見た数年後のテレビで、反日運動家として活躍している彼の姿を垣間みた時には、頭から冷水を浴びせられる感じがしたものです。日本政府は、何の目的で留学生を招いたのかと怒りを感じたものです。

学生サークルの思い出と日本人の外人意識

このサークル活動中、在日留学生問題の根の深さを知る事件に遭遇し、それが契機で私自身は生涯に亘って留学生と関わることになりました。事件が起こったのは、私が学部の2回生で、委員長の初仕事として計画した「東南アジアの留学生と西日本の工業地帯を訪問する」と銘打った見学旅行の報告会でのことでした(写真2)。趣意書を作成し、京都大学(以下、京大)総長や文部省・外務省・毎日新聞社の応援を得て実現し、その目的は達成したと思えた時に起きました。それは当時の京大総長をはじめ、学生部長、教養部長等京大関係者ばかりでなく、その旅行を後援して下さった会社の人達も参加した「西日本見学旅行の報告パーティ」でのことでした。旅行参加者24人(留学生13人、日本人8人、教官1人、事務官2人)が出席して、楽しい報告パーティが始まるはずでしたが、いくら待てども東南アジアからの男子留学生7人が出席せ



写真 2
西日本見学旅行報告集「旅」

ず、その事態に教養部長が「おまえらは、自分達だけで楽しんでたのか」と怒りをぶちまけ退席しました。留学生で出席したのは白人系の4人とタイの女子留学生と中国の留学生の6人でした。我々は、東南アジアの留学生が持っていた不満を薄々感じていたのですが、それを十分に汲み上げる力を持っておらず弁明できませんでした。彼らは報告会をボイコットするという方法でしか、その意思を表現出来なかったことは非常に残念に思いましたが、これを契機に京大では留学生の教育や事務システム等がずいぶん改善されました。

ボイコットの理由は、旅行中彼らを感じた遣り場のない憤懣と悲しみでした。もともと「主にアジア諸国からの留学生と日本人学生とが共同生活をしながら旅行し、瀬戸内の素晴らしい自然とその周辺に散在する各種産業を感じとりながら、日本の真の姿を捉えたい」という壮大な趣旨の見学旅行を計画していました。しかし、出発直前に大学側の意向で、我々のサークルで活動していない数人の白人系留学生(院生や研究生)の参加を受け入れざるをえませんでした。結果として、行く先々の工場の人達の関心も、テレビや新聞のインタビューも、数人の白人系留学生と女子留学生にだけ集中しました。それらに対する不満と、同行した教官までも同様な行為を示したとする抗議のボイコットでした。「主にアジア諸国の留学生と言っておきながら4人もの白人系留学生の参加を許したのはけしからぬ」、「自分達を資金集めの山車に使ったに過ぎない」と批判する者もいました。10日ほどの旅行中、行く先ぎのテレビや新聞に、白人系留学生しか登場しないことに最初の内こそ無関心を装っていた彼らも、ついに怒りを露わにしていたことが思い出されます。結局、マスコミは言うに及ばず、京都ばかりでなく津々浦々の日本人の多くが、外人＝白人の意識しかないと認識させられた旅行でした。

最近話題の某テレビ局の「何しに日本へ？」を見ていても、対象外国人のほとんどが欧米人であることは(外国人と分かり易いのが一因かも知れませんが)、「欧米人に接する時と他の外国人と接する時では、日本人の態度が異なっている」という当時の東南アジアの留学生が感じた「日本人の態度」は、50数年経過しても、変化していないと感じてしまうのは私だけでしょうか。

財団法人 京都「国際学生の家」の理念

東南アジアの留学生によるボイコット事件があった後、一緒に生活を共にするくらい、親しくならないと彼らの本音は聞き出せないと痛感し、京都に留学生寮は無かったこともあり、サークル活動の一環として留学生寮建設を文部省や外務省に請願する活動をしていました。その2年後、山科に公立の京都国際学友会館(現在、山科留学生寮)、聖護院に民間の(財)京都「国際学生の家」、1年ほど遅れて民間の女子留学生寮(現在廃寮)が建設されました。当時の京都の留学生数は100人ほどでしたが、現在は8,390人(平成26年度法務省統計(平成25年末実績))と大幅に増加したにもかかわらず、留学生の寮の数はそれに比例して増えず、現存する多くの寮は残念なことに留学生だけが居住する留学生寮です。

ボイコット事件後にもサークルの設立趣旨の大義名分とは裏腹に、留学生と日本人学生との対等な活動は進まず、一方的な日本人学生の奉仕活動としてしか成立しないサークル活動に悩んでいました。その頃「出会い (encounter)」と「共同の生 (life together)」を柱とした、(財) 京都「国際学生の家」の設立趣意書を見せていただき、そのうえ日本人学生も対等の立場で入居できることに感動して、一緒に活動していた多数の留学生と共に入寮しました。この(財) 京都「国際学生の家」は、設立者であり「共同の生」の理念を創ったスイス人牧師、故ウエルナー・コーラ (Werner Kohler) 博士 (神学者) と彼に賛同した故稲垣博京大教授の緊密な国際的協力によって、更にスイスと日本の民間人の寄付金を基礎に設立された留学生寮 (2013年に公益財団法人に認可) でした。

その設立の理念「共同の生」は現在も英文のままですが、要約すると「外国人学生と日本人学生とに提供する学寮という生活の場は、表層的な共存ではなく、異なる国家あるいは民族の間に厳然として存在する人種、宗教、慣習、文化さらにはイデオロギーといったものの相違を、寮生相互に対決 (confront) させ、これらの相違を互いに認め合った上で、一個の人格としての「出会い (Begegnung)」を体験させる道場である。この「出会い」を通じて、相互の相違を認識し、相互に承認し合うという、きわめて厳しい努力と体験を通じて得られる寛容 (Tolerance) が、人類普遍の願望である人類共存の道達成する有力な手段である」という趣旨が書かれています。だから「出会いの家 (Haus der Begegnung)」と呼ぶべきですが、HdB は別称になっています。その理由は、この呼称では日本人はこの学寮を理解してくれないと判断し、「国際」と付けたそうです。外国 (スイス) では既に国際的ですし、学生層も国際的ですので敢えて国際という形容詞はスイスでは必要ないのに対し、日本ではその必要があると判断したそうです。当時日本にも留学生の為に寄宿舍は存在しましたが、留学生に宿舎を提供するだけであって、国際的な人間教育の場として考慮されたものではありませんでした。そこで在来の学生寮とか寄宿舍とは本質的に異なることを示すために、「家庭」に通じる「家」、つまり「学生の家」という名称が選ばれたそうです。すなわち京都に集まる世界各国から来る留学生と日本人学生がハウスペアレントという家族と共に家庭的雰囲気と秩序の下に進められる共同生活を通じて国際的理解と友愛を培い深める「人間理解・人間形成の道場」という意味で「国際学生の家」という名称が選ばれたそうです。

京都国際学生をの家の運営の仕組み

出来るだけ多くの国からの留学生に入居してもらうため、1カ国からは3人までという制限がつけられています。日本人学生だけは、全寮生の1/3 (約10人) 入居できることになっています。当然、日本人の国際性のなさや幼児性を考慮して、日本人は院生以上となっていました。但し現在は学部学生でも入居できます。学寮の公式言語は日本語と英語になっています。開寮当時は男性のみでしたが、人類の半分は女性だからと約20年前から半数は女性となっています。開館以来半世紀経ち、寮生用34室

を利用した寮生は世界の79カ国から952名、併設されている研究員用11室を利用した学者、研究者は94カ国から2,956名の多きにのぼります。これらの寮生、研究者達は、京都における学際的研鑽の成果と共に、この「家」で体験した人間同士の愛と連帯意識をもって世界中で活躍しています。

この「共同の生」を実現させる仕組みの要は「家庭」というキーワードで、親に相当するハウスペアレント（学寮管理者）はとても重要です。設立当初はスイス人と日本人の二組のハウスペアレント家族が居ましたが、35年後の2000年にスイスとの共同運営が解消され、現在は日本人一家族が、ハウスペアレントとして一緒に生活して、寮生の生活のアドバイス、勉強援助やカウンセリングなどに当たっています。このハウスペアレントを補佐するのは、学生の入寮時の面接、カウンセリングなどを行う学寮運営委員会（ハウスコミッティー）という「ソフト」です。この委員会は、大学の留学生担当教官や学生の家OM（Old Member）達で構成されています。私たちは、何十年も掛けて蓄積し精選された日常活動や月間・年間を通じた行事への参加体験を通じて「共同の生」は実現できると考えています。また、家庭では子ども達が日常生活の雑用を分担しているように、各寮生はハウスの日常生活を維持するに必要な雑用（当番：例えば、ハウスキーパー当番、スポーツ当番、COMMONミール当番など）を分担することになっています。学寮の建物には、手軽に「共同の生」に参加できるよう、食事や音楽、スポーツ等を楽しめるハードの仕組み（共有台所、ピアノ、広い応接室、卓球台、ビリヤード、バレーボールコート等）を備えています。

更にユニークなソフトは「チーム」です。半期ごとに学生から選出されるチェアパーソン、バイスチェアパーソン、書記、会計、アドバイザーという5名の学生代表に、ハウスペアレントを入れた「チーム」という組織です。開寮間もない頃、理念だけが存在し、ルールは少ないほど良いと敢えて生活ルールも無い状態で共同生活を始めたのですが、1カ月も経たないうちに多くのトラブルが生じました。当時寮生であった私が学生の組織を作る必要があると発言して、当時の日本人ハウスペアレントの稲垣教授と大喧嘩になりました。当時は学生運動の盛んな時期で多くの大学寮が活動家の温床になっていたことから、先生が懸念したのも無理無いかと思われれます。大激論の末、野球のチームが監督も選手も一丸となって一緒に活動するように、学生の代表とハウスペアレントが一緒になった「チーム」という組織を作ることになりました。それから半世紀経ちますが「チーム」は非常に巧く機能しているソフトウェアだと思っています。

もう一つの重要な柱は、平均して月に2度ほど（初期では毎金曜日）、ハウスマザーとCOMMONミール当番の寮生達を作る各国料理を一緒に楽しむ夕



写真 3 COMMONミール（夕食会）

食会（コモンミール）です（写真3）。「食べる」という行為は、多様な地域の文化・慣習・宗教などを一番簡単に、しかも深く感じることでできる所作だと私たちは考えています。「ヒト」だけが食べ物を分けて食べる、頼まれないのに食べ物を買ってきて、分けて食べるという習性があります。「コモンミール」は、寮生達が互いに友好を深め、異なった国々の文化を理解する第一歩であり、「共同の生」の入り口であると考えています。コモンミールの後には、ハウスペアレントも含めた寮生にとって、一番重要な会議であるハウス・ミーティングを行うことになっています。寮生のチェアパーソンを議長に、ハウスで起こる諸問題を取り上げ、全員で議論を闘わせ、解決への努力をしながら「共同の生」を体感しています。

年間行事として、前期と後期の始めに新入生歓迎会が行われ、寮の理事やハウスコミティーの委員が参加、本学寮の「共同の生」という生活に早く馴染めるよう、寮生の委員によるハウス活動のガイダンス、新入生の自己紹介等が行なわれます。

前期には、「食」を通じた「地域住民との国際交流」と位置づけた「国際食べ物祭り」という行事があります（写真4）。地域の皆さんをご招待して、各国のお国自慢の料理を提供して留学生達との触れ合いを行っています。後期には学寮をサポートして下さる方々や団体の方々をご招待して、各国のお国自慢の料理と感謝の気持ちを表す「感謝祭」という行事も行っていきます。



写真 4 国際食べ物祭

学寮が多くの人達の善意で成立していることを、寮生自身に理解してもらおう行事です。

その他、年に2度京都近隣に出かけて日本の文化、歴史や景観を体験する一泊二日の小旅行や、滞在している研究者や学者によるセミナー等が行われています。更に、寮生達の交流と親睦を兼ねたダンスパーティやスポーツ大会などが行われています。日本的な意味でのクリスマスの名を借りた寮生達の「忘年会」でもあるクリスマス・パーティは、学寮の役員、親しい友人やOM達を招待して、自慢の料理やケーキを作り、一緒に食事をし、余興など、一年を振り返りながら親睦を図る楽しい行事もあります。更に年に2度、クリーニング・デイ（大掃除）と称して、寮生全員で、自分たちの生活空間である学寮の共有スペースである卓球室、ビリヤード室、応接室、運動場、洗濯室などを自分たちで、清掃し、整理整頓すること等も行っていきます。これらの活動の一部は京都市のサポートを受けています。

留学生を通じての国際交流をめざして

当学寮では、このような一年を通じたきめ細かい活動を通じて、留学生は日本人の親友を得て日本を深く理解し、日本人は留学生の親友を得る、結果として国際的なすばらしい人間関係を創る場となっています。現在、日本には留学生が18万人以上も来ています。彼ら留学生に単なる宿舎を提供するだけであっても、日本にとっても留学生にとっても非常に残念で悲しいことだと思っています。日本を選択して学びにきた留学生に、国際的な人間教育の協力者として位置づけ、日本の学生達との共同生活を通じて国際的理解と友愛を培い深める「人間理解・人間形成の場」としての留学生寮を普及して行きたいと思っています。

平成27年度は学寮設立50周年、半世紀前の東西冷戦の最も緊張した時期に設立されました。東西冷戦後は、東と西の対立ではなく「民族」、「宗教」、「環境」及び「格差」という新たな対立に世界は曝されています。フランスの風刺週刊紙襲撃事件や日本人人質事件などのニュースを見るにつけ、コーラ先生の当学寮設立の意義は未だ失われず、更に新たな事態にむけて継続し、創造しなければならないと感じています。今秋には設立50周年記念行事を計画しています。しかし、日本列島を襲う大地震に備えて建物の耐震診断を行った結果、残念なことに建築後50年も経つ建物ですので耐震補強が不可欠で、1.5億円という大金が必要、しかも補強しても何年維持できるかは不明と診断されました。

そこで学寮内外の知恵を絞った結果、国内外の学生に「共同の生」を実現するための場を提供するという基本理念を維持しながら、新時代に相応しい新しい活動拠点となる建物として、再建する案を秋の記念行事に提示し、その実現に向けて努力を続けるつもりです。

最後に、我々のホームページ (<http://hdbkyoto.jp/>) には、種々の情報を掲載していますので、参照して頂ければ有り難いです。

参考資料

- 内海博司、「留学生問題の問いかけているもの」明石書店発行「市民の目からみた国際化」
pp31-37、1989年
- 内海博司、「旅」京大留学生友の会発行、pp40-42、1963年
- 内海博司、「学問の国際性と留学生問題」、「YEAR BOOK1989」京都「国際学生の家」発行
pp5-16、1989年
- 内海博司、「京都国際学生の家(HdB)の建替問題について」、「YEAR BOOK2014」京都「国際学生の家」
発行 pp14-17、2014年